ステファンの指輪

奇跡

マリモ

1

青い空に白い雲が浮かんでいる。
太平洋の真ん中を豪華客船がゆったりと進んでいる。
ステファンはあたりを見回した。　当たり前のことだがどこを見回しても周りは海原だった。
くっきりとはるか向こうに水平線だけが浮かんでいる。　おもわず口笛が出た。
口笛を吹きながらステファン・モールテンは甲板を歩いた。
　ステファンがこの船旅を始めてから早くも１ヶ月近く過ぎている。 すべては順調に進行していた。
思えば父が死んだのはちょうど去年の今頃だった。
父の名前はハインリッヒと言った。　貿易商だった父は巨額の富を築いていた。
広大な土地、お城のように立派な家と屋敷、 それらが父の死と同時にステファンの手元に転がり込んできた。
「やっとツキが私のところに回ってきた」　父が死んだ時、ステファンは思わずそう叫んだものだ。
母のアーリアは彼が幼少の頃にすでに死んでこの世にはいない。
父はその後すぐに若い女、ロミーと再婚した。　彼は邪魔者扱いとなって施設にあずけられた。
それ以後どんなに辛酸をなめたことか計り知れない。　この恨みは決して忘れない。

捨て犬のように施設に預け捨てられてからというもの、親の顔も見たことはなかった。
見たくもなかった。施設を出ると放浪者のような生活を送った。
ステファンは今年もう５１歳になる。　仕事を転々として何とか食いつないできた。
父はすでに８３歳となっていた。　父とその若い女ロミーとの間に子どもはいなかった。
ステファンが考えたことは父の莫大な財産を自分が独り占めすることだった。
それというのも父が末期ガンに冒されて余命幾ばくもないと知った時からだ。
おそらく父はその女ロミーにすべての遺産を譲るだろう。
断じてそうさせてはならない。
自分をさながら虫けらのように捨て去り、その後彼のことを一顧だにしなかった父ハインリッヒへの復讐を果たすこ　　と。 それが今までのステファンの生きる目的だったのだ。　今ここで父親に死なれその女に財産を奪われることは筆舌に表せないほどの痛苦だ。　それは彼にとって絶望を意味した。

父は死の病に伏している。　今を逃してもう二度とチャンスはない。
父の後妻、つまりステファンの義母ロミーは６７歳だった。
この女、ロミーを殺すこと。　ステファンの目的はただ一つ、その一点に凝縮された。
どうやって殺すか。 その事について終日考える日々が続いた。
人が人を殺す方法はたくさんある。古今東西殺人の事例はごまんとあるが、
これは殺人であるとわかる方法は　当然のことだが避けねばならない。
その結果、彼が出した結論は、第三者をしてこれは事故だと思わせることがもっともいいということだった。
自殺にみせかける方法もあるがこれは難易度が少し高くなる。自殺の動機が必ず問題となるからだ。
この義母の場合は巨額の遺産が手に入る直前に自殺を図る ことは考えにくいと警察はすぐに疑うだろう。
ステファンは腕を組んで考えた。そしてつぶやく。　「そうだ。あれが一番いい」
もっとも自然な方法は交通事故だ。　ステファンはそう考えた。過去十年間の資料を調べた結果、交通事故を装った殺人がもっとも成功率が高いということを導き出した。
交通事故はもっとも我々の身近に起こりうる事故だ。しかも、交通事故は死亡事故であれ物損事故であれ、直接的には交通警察の手で初動の調べは行われる。 交通警察はいわば殺しの事件のプロではない。 事故に不審点があった場合にのみ、殺人課が派遣される。　しかも、この頃は交通事故の多発のため交通警察も忙しい。　一通りの調べで済ませる事が多く、よほどの不審点がない限り、殺人課を呼ぶようなことがない事をステファンは知っていた。もっともシンプルで自然な方法で殺人は行われるべきだった。

義母のデイリールーティン（毎日の行動）をステファンは調べた。　義母は　毎朝５時半に起床。　食事は午前７時。　食事までの間に、（ここがこの義母の特徴なのだが）、サイクリングをする。　美容とダイエットのためにずっとこれを続けている。　普通ならば食事前の散歩、となるはずだが、彼女の場合は高齢にもかかわらずサイクリング用の高級自転車を３０分ばかり乗り回す。　たいてい７～８キロ程度は走る。　豪邸から出発して、５キロばかり離れたグリムルリン宮殿を一周して帰ってくる。　途中には人気のないこんもりと茂る小さな森があったり、その森を過ぎると　今度はにぎやかな大通りに出たりする。　その大通りを突っ切ると宮殿が見えてくる。　その付近一帯は公園になっていて自転車で周回できるようになっている。　そこをまわるのだ。

犯行は実行された。　誰でもが考えつくような方法、しかも誰にでもできるような簡単な方法で。　ある朝、例の小さな森林を散歩している人が、道ばたに自転車が倒れているのを発見した。　それだけではなく、すぐ近くの幅３０センチほどの溝に顔を突っ込む格好で、年配の女性が倒れているのを見つけた。　溝には約１０センチぐらいの深さだったが水が流れていた。警察は死因を調べた　死体は司法解剖に回された。　死因は窒息死だった。肺には大量の水が入っていた。暴行などのあとはない。　倒れた時のものか、頭や顔、肩、腕などに打撲の痕がある。　特に頭を強く打ったと見えて頭蓋骨折をしていた。ブレーキ痕はない。　目撃者はいなかった。当初は状況からして事故死であるという線で警察は動いた。　だが、その女性が大富豪の妻ロミーであることがわかると警察は方針を転換して事件性の面からも捜査を入れることとなった。　病床の父親にも事情聴取が入った。　あえぎあえぎ父は聴取に応じた。　当然、遺産相続の話も出た。息子であるステファンの事も父の口から出た。　だが、父はステファンにはもう何十年も出会ってないと言う。　今では出会う気もないし遺産を与える意志もないと言う。　遺産はロミーに与える予定だったが彼女が亡くなった今は社会福祉団体に寄付するという。警察はハインリッヒには自分の息子がありながらなぜそうなるのか、その点を不思議に思った。ハインリッヒの妻ロミーが死んで得をするのは誰か。　遺産は当然息子に相続される。そのことを考えると息子のステファンにも矢が向く。警察はステファンの所に向かった。　だが、ステファンに事情をきいてみると、同じようなことを言う。　冗談じゃない。あんな父の遺産など眼中にはありません。くそっくらえです。福祉団体にでも寄付しますよ。警察は驚いた。父親も息子もこれだけの遺産について何の屈託も持っていない。そのことに警察は強い疑問を持った。　が、二人の経歴について調べてみると相互に複雑な事情と確執があるにはあった。だがそのことで今となっては特に今回の犯罪動機となる要素はなかった。　息子のステファンが遺産相続放棄の意志を示している点が何より警察には不思議ではあった。が過去の父子の相克の経歴からするとその言い分も首肯できないことはなかった。　義母には特にほかの人に恨まれるような背景もなかった。怨恨の線も無い。　犯罪に結びつく決定的な証拠もなく、結局のところ警察はこれは事故であるとの最終判断をくだした。　サイクリングの途中にロミーは脇見か何かしていて溝に転落した。　転落した拍子に頭を強く打ち意識不明になった。そのまま顔を水深１０センチの流れの中に突っ込んで意識回復しないまま大量の水を飲み窒息死した、というものだった。　頭の骨折の程度と角度、顔の傷、肩、腕、それぞれの打撲痕などを詳細に検討した結果そのような結論になったと警察は発表した。　ステファンは心の中で喝采した。　やった！

やった！ウェルダン！　確かに私はやったのだ。　義母殺害の犯行の様子はこうだ。　真相を言っておこう。　それをここでは知っておいてもらいたい。きわめて単純でかつ　子どもじみた方法でステファンはそれを実行した。誰でもがやりそうな方法。それが一番無難だということを知っていた。　その朝。　ステファンはカツラをつけてめがねをかけた。帽子をかぶり変装した。　ついでにマントまでかぶった。　いつも彼女が通るその森林の小径が絶好の犯行の場所だった。　めったに人は通らない。ごくたまに散歩者が通り過ぎることはあるが、この時間帯にはまず通らない。それは何度も事前に調べておいた。　ステファンは森の木陰に隠れて待ち伏せた。　やがて彼女が自転車を走らせて来た。　ここまであと２０メートル、１０メートル。　けっこうなスピードだ。　５メートルまで近づいた時、彼は飛び出した。　すかさず彼女に体当たりを食らわせた。　彼女はもんどり打って自転車ごと溝の方に転倒した。　ガシャンという大きな音とともに彼女は倒れ側溝の角で頭を打ち付けた。　ううう・・・、と彼女はうめき、のたうち回っている。　そこへ彼は躍りかかり、彼女の頭をかかえるとそのまま、うつぶせにさせた。　彼女は抵抗しなかった。いや、とっさの事で何もできなかったといっていい。　ステファンは彼女の髪の毛をつかんで側溝の水の中に顔を押しつけた。　そのままじっと押しつけた。彼女は上体をくねらせ、もがいた。　ステファンには長い時間が経ったように思われた。　だが、実際は２分間も経っていなかっただろう。　彼女は動かなくなった。　復讐だ。　彼は小さくつぶやいた。

　彼女が死に、警察からの事情聴取をされるたあと、その三、四日後に父は急に危篤状態に陥った。　そしてそのまま眠るように父は息を引き取った。　遺産のことについては遺書が残されていたが、それは「義母ロミーにすべての財産を譲る」というものだった。遺産の半分は息子ステファンに半譲るとも、社会福祉団体に譲るとも書かれていなかった。予想通りだった。　なぜ私はここまで父に疎まれなければならないのか。　それを思うと憎悪で目の前が真っ暗になる。
　ただ、その義母が死んだ今、調停人の調整で、実子であるステファンにそのすべての財産相続権があるという判断は正しいとの結果が出された。　当然といえば当然のことであった。　ステファンはほくそえんだ。　これでいいのだ。これが本来あるべき姿なのだ。何も卑屈になる必要はない。　当然のことなのだ。　だが、ステファンは遺産相続を受け取りを拒否すると警察には豪語していた。　今その言葉をひっくり返して全財産を受け取れば当然疑惑は再燃し、再度の捜査がステファンに及ぶだろう。それは避けるべきだった。
　父は時価３億円の指輪をはめていた。　ステファンはそれだけを形見として自分の指にはめた。　巨額の株式、銀行預金などは、すべて施設に寄付をすることにした。　豪邸も売り払った。経営していた会社も解散し、いっさいの資産、財産を、福祉施設に予告通りに寄付した。
　また逆に父の残した遺産などはそういう風に考えれば確かに何の未練もなかった。　ステファンにとってはその遺産は吐き気を催したくなるようなゴミ同然だったのかもしれない。　遺産を独り占めするということが彼の目標でもあったが、それはある意味でそれを綺麗さっぱりと無一文にすることをも意味していたのだ。　父の大事にしていたものはすべて抹殺したかった。
ただ、指輪だけはなぜか違った。それは不思議な光を放ちさながらステファンに微笑み　かけるような表情を浮かべている。この指輪だけは愛情深い不思議な魅力を彼に感じさ　せた。　財産をすべて処分したその後、ステファンは船の旅に出発した。　世界一周旅行ができるだけの最低限の金を持ち、ステファンは今回の船旅に出発したのだ。　すべてはそういう事からこの船旅は始まった。　こうすることが今度は父への復讐だった。　ただ一つ、その指輪だけは身につけた。

ステファンにとって、今回の船旅は実に快適だった。　誰でもそうだが目的を達したあとの自由な旅というものは実に楽しい。　船の中で何人かの友人もできた。　あと数日でこの船旅も終了する。　思えばこの何十年間、自分の人生の目的は父の財産を奪うこと。　そして、復讐をすること。この一点に捧げられてきた。　いわば、もう思い残すことはない、ともいえる。　船旅の終盤は、ひょっとしたら自分人生の終盤かもしれない。　そう思うと妙にさばさばした気分にもなってくる。　だが、父が死んだあとこの船の旅でふと思うことは、なぜ父はこれほどまでに　私を嫌ったのだろう、という疑念だった。　とても人間の血が流れているとは思えないような仕打ちを受けた。　私には父にこれほどまでに嫌われる理由がまったくわからない。　せめて幼くして死んだ母が生きていてくれたらそれを問いただし聞くことができたかもしれない。　何度も考えたことは、私は父の子ではないのではないかということだ。　血液型はしかし、父と同じAB型だ。　顔立ちもまったく似ていないことはないと思う。特に鼻のちょっと段になったような形などはそっくりでさえある。　ステファンはいくら考えてもその事がわからなかった。

船は給油のためにハワイ島近くのとある島に停泊した。　二日間の停泊予定だった。　ひさしぶりの陸だ。　船客達はみんなやれやれと言う表情でにこやかに下船した。　ステファンは、この停泊期間を利用して船の中で知り合った友人とボートを借りて魚釣りに出かけることにした。港は活気があり、物売りのいせいのいい声があちこちから飛んでくる。　「陸はやっぱりいいねえ。やっぱり地に足がついてる感じだよ」　大きく背伸びして深呼吸をするとステファンは釣り道具屋に入った。　やがて出てくると完全な釣りスタイルで準備万端という具合に今度は　ボートに乗り込んだ。　プレジャーボートは水しぶきをあげながら走る。　爽快だ。　やがて沖合まで来ると、そこで止まり、一同は釣り糸を垂れた。　小一時間もそうしていただろうか。だが。　不思議なことにステファンは一匹も釣れなかった。友人はすでに大物を何匹か　しとめている。　「そんな馬鹿な」　ステファンは焦った。　ええい、と釣り糸を勢いよく投げた。　するとその時、なんとも信じられないことが起きた。　薬指から例の大事な指輪がはずれたのだ。　指輪はするりとステファンの指をすべり、５，６メートル先の海の中ににポチャリと沈んでいった。　「うわーー。そんな馬鹿な！」　ステファンは叫んだ。信じられない思いだった。　が、それがやがて本当だということが　わかると　ステファンはその場に倒れ込んでしまった。

俺の大事な指輪が海に！！　信じられないことだった。　なんでまた外れてしまったのだ。ステファンは気を失いそうになりながらそれでも何と　か立ち上がり海の中を覗き込んだ。　青色とも緑色ともつかない海面は無数のあぶくを漂わせながらただ無表情に波を往復させているだけだった。　「どうしたい？急に。何かあったのかい？」　何も気づかない友人は怪訝そうにステファンを見ながらそう言った。　ステファンはがっくりとうな垂れて、「もう駄目だ、俺の大事な指輪を海に落としてし　まったんだよ。時価３億円だぜ、もう俺は駄目だ」　それを聞いて友人は目を丸くした。　「何だって。３億円の指輪！」　プレジャーボートは港に引き返した。　とてもじゃないがこれ以上釣りをする気にはなれなかった。

　二日後に、豪華客船はハワイの近くの島を出航した。　船は十分な燃料と食材を調達し終　えて汽笛の音も勇ましく出航した。　ステファンはすっかり意気消沈していた。　神は俺を見放したのか。やっと今までの苦労　が報われこれから自由な人生が目の前に広がったその矢先にこんなトラブルが起きようとは。天地を恨みたいような気になっていた。これも定めなのか。義母を殺した報いなのかもしれなかった。いや、しかし五十年間に渡って父に疎んぜられたこの俺はどうなるのだ。俺の惨めな人生を回復させるためにこそ義母は死なねばならなかったのだ。　ステファンはそう思いなおした。　海に落ちた指輪。そのことを思うとやりきれない。思い出してもどうにもならないが魂の抜けた亡霊のようにいつまでもデッキにたたずんでいた。

豪華客船の大ホールはにぎわっていた。生バンドがダンス音楽を演奏している。そこではちょっとしたパーティが開かれていた。イブニングドレス姿の女性達、きちんと正装でネクタイを結んだ男性達が楽しそうにダンスを踊っている。　ホールの隣は豪華な高級レストランとなっていた。　ステファンは予約していた席に着きディナーを注文した。ここのところ指輪のことで悶々とした思いで夜も眠られなかった。げっそりとやつれていた。食欲はまったくなかったがパーティのにぎやかさに誘われてここに来た。　大きな鯛の丸焼きレシピがその夜のステファンのメインディッシュだった。ワインで口をしめらすと、それでも一口食べてみようという気になった。少しだけその魚を食べてみるにした。　ちょうどナイフを腹に入れたその時だった。　カチリとナイフに何かが当たった。「おや、何だろう」ステファンは首をかしげながらフォークとナイフでその魚の腑をより分けた。その瞬間、ステファンの目の前に信じられないものが出てきた。それは海に落とした自分のあの指輪だったのだ！　「ノー！」　ウソだろ！とステファンは思わず絶叫した。まさかこんな所に！　ステファンはその指輪を手に取るとまじまじとそれを見つめた。それは間違いなく自分のあの３億円の指輪だった。ステファンは小躍りすると席を立って両手を挙げてばんざーいと大きな声で叫んだ。周りの人達が何事かといぶかしげにステファンを見ている。 まさかこんな奇跡が起きるとは。ステファンはこみあげてくる笑いを押さえられなかった。手を叩きながら大きな声で笑った。 ウエイターが飛んできて「お客様、どうされましたか」と心配顔でステファンの顔を覗き込んだ。　「あっはははあーー。奇跡が起こったんだよ。奇跡が。あっはははあ」　そう言いながら今度は恥も外聞もなく笑いながら床の上を転げ回るのだった。

指輪を海に落としたのは釣りをしていた時だ。その後魚が、この鯛がその指輪を飲み込んだのだ。そして近くの漁師がこの魚を釣り上げるかどうかして漁港に引き揚げた。港で豪華客船が二日間の停を泊している間に、燃料や食材を調達して船内に積み込んだ。新鮮な魚介類、この魚もその漁港から購入されて一緒に積み込まれた。 そして船内のコックに調理され、回り回って偶然にもステファンの皿の上に盛られた。と、信じられないことだがこういう事だった。
それから二ヶ月後、奇跡の航海を終えて自分の家についたステファンは山のようにたまっている郵便物の整理にかかった。メイドが家の管理はしてくれていたのだが郵便物までは開封するわけにはいかない。ステファンは三日がかりでそれをチェックした。 その中に布で厳重にくるまれた書簡があった。何重にもテープや紐で巻かれていてそれを開封するのに相当時間を費やしたがやっとそれを外すと中には１通の手紙が入っていた。宛先は、ステファン・Ｆ・モールテン様。それが自分であることは間違いないが、 差出人の名前を見たときにステファンは心臓が止まりそうになった。目が飛び出るほど驚いた。 ハインリッヒ・Ｆ・モールテンより。 それはすでに死んだはずの自分の父親からの手紙だった。

ステファンへ
　もう余命幾ばくもない私だがまだペンがとれる間にこれを書いておく。とはいえ、もう指に十分な力が入らない。これが私の死後１年以上経ってからお前宛に届くように私の信頼できる執事に依頼した。確かに私はお前を遠くしりぞけて施設に預けた。辛い思いをしたと思うがそれがなぜかがわかるだろう。私を許すか許さぬかはお前の自由だが一つ言えることはここに書いたことは真実であるということだ。これを信じるか信じないかもまたお前の自由ではあるが。　１年後にこれをこのような形で渡す理由は私への憎しみが少しでも和らいでからの方がいいだろうからという理由だ。憎悪した人間も死んでから１年も経つと憎しみも少しは薄れるものだ。お前はお前の人生をこれから存分に楽しむように。それを心から祈念している。　驚かないでほしい。実はお前の母親はお前が幼少の頃に亡くなったマーリアでは無いのだ。お前は自分の産みの母親はアーリアだと思っていたようだがそうではない。　お前の実の母親はお前が憎んでいた義母ロミーなのだ。ロミーには子が無いと思っていたのだろうが、お前こそ義母ロミーの子なのだ。義母ではなくお前にとって実の母なのだ。　お前はロミーが１６歳の時の子だ。　アーリアと私は確かに結婚していた。が、これがとんでもない悪妻だった。私はその当時貿易取引に失敗し大変な痛手を受けていた。アーリアは仕方なく取引先の相手からやむなく押しつけられた女だったのだ。あの女は麻薬をやっていてその頃は手がつけられなかった。アーリアは元娼婦だった。手のつけられない女だったので取引相手の男は私に押しつけてそのあばずれ女から開放されたというわけだ。夫婦関係も断絶していた。家庭も崩壊していた。　私にはそれ以前から別に好きな女がいた。それがロミーだった。ただし、ロミーもその頃にはすでにほかの男と結婚していた。だが酒癖が悪くしょっちゅう暴力をふるう夫だった。ロミーもまた夫婦の間は完全に冷えていたのだ。そんなときにお互いに知り合ったわけだ。俗に言えば不倫の仲というわけだが、ロミーのお腹にはすでにお前が宿っていた。二人は相談の上お前を産むことを決心したのだ。お互いにどちらの家庭も崩壊していた。　ゆくゆく二人はお互いの連れ合いと離婚して一緒になりたいと強く思っていたのだ。だからお前を産んだ。内々で私の信頼のおける執事の妻の家でお前は育ててもらっていた。　これは誰にも隠していたことなのだ。　お前の実の父親はだからこの私であることは間違いない。だが、いつまでも隠しておくわけにはいかない。私はお前を家に引き取ろうと考えた。だがアーリアにとってそれは面白かろうはずはない。許すはずもなかった。嫉妬深い強欲な女だった。　しかしお前を育てるためには家で引き取るしかない。すったもんだのあげくお前を家に引き入れ私が育てることにしたのだ。メイドがベビーシッター役をしてくれた。だがことあるごとにアーリアはとことんお前を虐待した。下手をするとお前を殺しかねなかった。そんなわけでやむなくお前を施設へ預けるしかなかったのだ。 その後何十年も私たち夫婦はなぜお前を遠ざけたか。その理由は何かを書いておく。　それに答える前にまず真実を書いておこう。悪妻アーリアは病気で死んだのではない。 私たち（私とロミーの二人）が殺したのだ。それのみならず、ロミーの夫も私たちの手によって殺された。そうして私達はやっと自由を手に入れ晴れて本当の夫婦になれたのだ。　彼らをどうやって殺したかということの詳細はここで語る必要も

なかろうが、要するに毎日少量の毒物類（ヒ素その他）を食事に入れたのだ。じわりじわりと体力が落ち身体の調子が悪くなっていく。そしてアーリアもロミーの夫もついに死んだ。警察もその時はまったく関知しなかった。　その後、私達には誰にも邪魔されずに平和な生活が戻った。　だが気がかりなのはお前のことだった。一日も早くお前を私達の家に引き取りたかった。お前は知らないだろうが何十回となく私達は施設に行き、引き取り許可をお願いしたのだ。　ところが、どういうわけか施設の所長はもとより市の関係責任者は頑として許可しなかった。なぜだろうか。　それはお前を殺人容疑者から保護するためだったのだ。この意味がわかるかね。　これは後でわかったのだが、つまり警察の関係者がロミーの夫の死とアーリアの死との時期が同じであること、私達夫婦の結婚がその直後であることなどを不審に思い、その頃になってからじわじわと捜査の手を伸ばしていたからなのだった。貿易商の私の子が施設に入っているというのも警察にしてみれば不自然な話だった。　結局、私達夫婦は殺人容疑で逮捕されたのだ。　家宅捜索が行われた。ロミーの家の台所からヒ素のわずかな粉末が発見されたのだ。殺人罪で起訴された。それから長い裁判が始まった。だが検察にとって、私達には十分な殺人の動機はあっても決定的な物的な証拠が無かった。　なぜロミーの家にヒ素があったのかということを検察はついてきた。だが、医師の診断書は肝臓疾患による病死となっていた。遺体を解剖しようにも火葬されているので時すでに遅しだった。一審は無罪だった。検察はさらに控訴した。状況証拠だけで起訴したのだ。結局最高裁まで行った。そして結果は無罪。長い年月だった。　その間にお前は施設を出ていった。施設に問い合わせてもどこへ行ったかわからない。完全な消息不明になっていた。もちろん私達の家にも連絡もしてこなかった。私達は新聞広告も出したが梨のつぶてだった。　私達はもうお前を捜し出すのはあきらめていた。　ところが、偶然にもそうだ、お前の母であるロミーが事故で亡くなった時に警察からこの街の近くにお前が来ているという情報をその時に初めて知った。私には、ピンと来た。私にだけがわかる直感だった。お前がロミーを殺したのだと。もちろん具体的証拠は何もわからない。ただの直感だ。お前がロミーを殺したのだということだけは直感として私にはわかった。　その時に私はお前に対して同情するのはやめた。もうすべてが遅すぎた。父と子の間においては、すべてが正反対の理解の上に成り立っていた。とりわけお前にとっては誤解の上に成り立ってしまっていた人生だった。その間違いを早くに正してやる機会を私達は失ったのだった。すべては遅かった。　その時に決心したのだ。私の遺産はお前には譲らずに社会に還元しようと。　だが安心したまえ。　遺言書にはそうは書かない。ロミーは死んだが「ロミーに贈る」と書く。そのあとはお前の自由にするがいい。それがせめてもの私のお前への償いだ。　グッド　ラック！　　ハインリッヒ・Ｆ・モールテン

手紙を読み終えたステファンは頭を殴られたような衝撃を受けた。何度もそれを読み直した。だが、それは自分の読み間違いでも何でもなかった。義母ロミーが自分の本当の母親だったとは！それはどうしても信じがたかった。また父親とロミーの過去にまつわる相方二人の殺人！が為されていたとは。　　「嘘だ。嘘に決まっている」ステファンは叫んだ。　「俺を混乱させるためにこんな手紙をよこしやがったに決まっている」　ステファンは机をどんと叩いた。　その時、左手にはめていた指輪がまたしてもぽんと外れた。　外れた指輪は勢いよくスピンしながら転がってすぐ近くにあった暖炉の中へ吸い込まれていった。あっという間の事だった。　「ありゃ！」ステファンは思わず声を出した。　大急ぎで暖炉の火を消した。真剣な眼差しで暖炉の中を調べると指輪は隅っこの方にちょこんと鎮座していた。　「やれやれ」ほっとしてステファンは長い柄でそれをつまみ上げるとテーブルの台の上に乗せた。　ステファンはそれを綺麗に拭いてもう一度自分の指にはめた。　その刹那、急激な痛みが指に走った。指輪がどんどん彼の指を締め付けていた。容赦なく指輪が肉に食い込んでくる。　「うわー」ステファンは叫び声をあげた。　「指がちぎれる。助けてくれ」　事実、信じられないことに指輪は彼の指を切断しようとしていた。　悶絶して床の上を転げ回るステファン。　ステファンはあまりの痛さに気を失っていた。　そのそばにはちぎれたステファンの指が転がっている。　指輪の姿はどこにも発見できなかった。

了